さかまた

鴨川シーワールド　NO.28

シーワールドのアニマル達

●オーストラリアアシカのサンディー

シーワールドのアシカショーに出演しているアシカの中にずんぐりしてちょっと毛色の変わったアシカが目に付きます。このアシカが今回紹介するオーストラリアアシカのサンディーです。

オーストラリアアシカは、オーストラリア南西岸に分布するアシカの仲間で、原産国オーストラリア以外では、香港と日本の当館にしか飼育されていません。一般に飼育されているカリフォルニアアシカと比べ四肢が短く、ずんぐりした体形で、体色は淡いクリーム色をしています。性格はどことなくおっとりしていますが、顔や体格に似合わず好奇心が強く大変いたずら好きです。

サンディーは、昭和56年8月31日、世界で初めて当館で繁殖したオーストラリアアシカで、日本動物園水族館協会より「繁殖賞」を受けました。

満6年目を迎え、既に弟も居るサンディーは、体格も立派になり、今では体重85kgとなりました。昭和58年10月には「水戸黄門パートII」の子役としてアシカショーにデビューし活躍しましたが、その後の訓練により芸の種目も増し、ハーモニカの8つの音階を識別して動作を行なったり、とぼけた風貌と相まった人まねのパントマイムを演じるなどして、お客様の笑いを誘っています。

これからもアシカショーでサンディーを見かけた時には、ぜひ応援してやって下さい。（日和田）

▲オーストラリアアシカ　*Neophoca cinerea*

●右に目のあるヒラメ

カレイ・ヒラメの仲間のうち腹側を手前に置いた時目が体の右側にあるものをカレイ、左側にあるものをヒラメと一般に呼んでいます。そのため「左ヒラメの右カレイ」という言葉が生まれたのですが例外もあります。たとえばヌマガレイは日本産は100%左目ですがアラスカ産は70%、カリフォルニア産は左目と右目が50%ずつとなっています。しかし、ヒラメについては世界中どこでも左側に目がついています。

昭和61年5月15日、変なヒラメが水揚げされたとの連絡を受けて鴨川漁業協同組合に出かけてみたところ、体の右側に目のあるヒラメを囲んで人々が目をまるくしていました。ヒラメは魚の中では最高級魚で、活かしたまま取り引きされ1尾ずつていねいに扱われるためこのような珍しいヒラメも発見できたのでしょう。右目のヒラメというのは文献では数例しかなく、鴨川ではもちろん初めてのことです。このヒラメは、水族館に運びこまれ7月から特設水槽で公開されましたが、目の位置以外は普通のヒラメと変わりないためか、「これはカレイでしょ」と言う人が多く、どうも珍しさを理解してもらえていません。

ヒラメは稚魚の時は体の両側に目があり、成長するとともに右目は左側に移動しますが、このヒラメだけがどうして逆になってしまったのかはまだ良く判っていません。今後の調査に期待しています。（津崎）

▲右目のヒラメ（左）と普通のヒラメ（右）*Paralichthys olivaceus*

さかまた No.28　（禁無断転載）
編集・発行　鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121
発行日　昭和61年12月

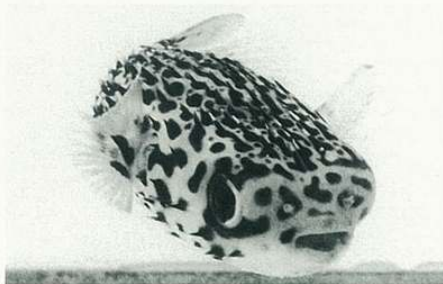
（昭和61年夏・特別展示）
房総の海・黒潮とそのいきもの達

房総半島は、世界最大の海流である黒潮に沿岸を直接洗われるため、年間を通じて温暖な気候に恵まれています。その黒潮は、日本列島の太平洋岸にそって北上し房総半島沖を過ぎると大きく東へ流れを変え、日本列島から離れていくため房総半島は、日本列島の中で黒潮本流の影響を受ける最も東に位置し、各種動植物の分布の北限にもなっています。また、鴨川沖には鴨川海底谷と呼ばれる深い狭谷があり、この海底谷と変動する黒潮の流れとは、密接な関係を有しているため、房総の海の中でも特に鴨川は、黒潮とそのいきもの達がくり広げる様々なドラマを見ることができます。

そこで、黒潮の流れの変化とそれに乗って房総にやってくる生物との関係、鴨川海底谷の果たす役割、さらには黒潮本流の北限にあたる房総の生物などを紹介することを目的として、「房総の海・黒潮とそのいきもの達」のテーマで展示を行いました。

▲特別展示　房総の海・黒潮とそのいきもの達。

Ⅰ）今、鴨川沖の流れは！

毎年、房総半島には、黒潮の流れに乗って熱帯や亜熱帯からいろいろな生物がやってきます。その中には、色とりどりのチョウチョウウオやスズメダイの仲間、ハリセンボンの仲間のように、フィリッピン近海で産みおとされた卵が流れに乗りふ化し、成長しながら北上を続けるものや、その途中で沿岸に住みつくものなどがあり、房総の夏の磯を楽しませてくれます。しかし、冬になると水温など、本来の生息地との生活環境の違いにより、そのほとんどは死滅してしまいます。

▲ヤセハリセンボン　*Diodon eydovxii*

房総にやってくるこれらの生物たちの種類は、黒潮の流れの変化によって特徴がみられます。黒潮の流れには、図1に示すようにA型からN型までの5つのパターンがあります。今年の黒潮のコースは沿岸に大きな冷水塊はなく、紀伊半島から遠州灘、そして伊豆諸島の八丈島付近を横断し、房総沖を通過するN型の流れが中心となっています。しかし、昭和55年以降、黒潮のコースは短期的な変動の繰り返しが続いており、今年はその繰り返しの周期が特に短く、特異な海況となっています。そのためか、今年は今までとは違った生物の出現がありました。例えば、ハリセンボンよりもっと南に生息しているヤセハリセンボンが8月に鴨川でみられました。また、アカウミガメの産卵が多く、鴨川付近の砂浜では例年の5倍近くの産卵が確認されました。当館前の砂浜でも、6月末から7月にかけて6回の産卵を確認しており8月下旬から9月にかけて赤ちゃんガメが元気に砂の中から出てきました。このほかにも、タコの仲間で、カイダコと呼ばれるアオイガイが例年よりも多く、また魚の仲間では、バショウカジキの子どもも見られました。これらとは逆に、黒潮に乗って回遊してくる魚の中で、カツオ・シイラなどは例年より沖合を通ったためか、鴨川沿岸ではあまり目につきませんでした。

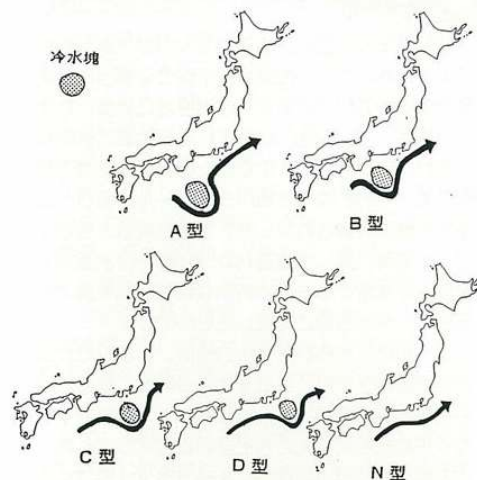



図１．黒潮のコースのパターン

Ⅱ）鴨川海底谷と黒潮

鴨川沖の定置網には、シイラやソウダガツオなどの表層の魚ばかりではなく、ハダカイワシなどの深海の魚まで、多種多様な魚たちを見ることができます。その理由は、鴨川海底谷があるからです。鴨川海底谷は、世界一深い日本海溝につながり、その末端は、鴨川沖3㎞まで延びています。日本列島でこのように深い海底谷が岸近くまで来ているのは、鴨川を含めて数ヵ所だけです。この海底谷に、流量毎秒5000万トン（利根川の15万倍）流速毎秒 2.5mという世界最大の海流〝黒潮〟がぶつかると湧昇流が起きます。そして、そこに発生するプランクトンを求めてたくさんの生物が集まります。鴨川沖は魚たちのメインストリートといったところでしょうか。

図２．鴨川海底谷と黒潮

当館で展示している魚たちの多くは、この鴨川沖の定置網から搬入したものです。定置網より搬入した魚たちは、網との接触などによるスレ症が少ないため、当館では、マンボウをはじめ、キントキダイ、サギフエなど他の漁法ではなかなか生かすことのできない魚たちの展示ができるのです。

この海底谷には、まだ私たちの目に触れたことのない生物もたくさん棲んでいることでしょうから、黒潮の流れによっては、今後大変珍しいいきもの達とも会うことができるものと楽しみにしています。

Ⅲ）黒潮本流の北限

房総の海岸には、ハマオモト（ハマユウ）などの暖地系の海岸植物が自生し、水深5ｍ前後の磯には、ハナヤサイサンゴやサンゴイソギンチャクを代表とする様々な種類のサンゴやイソギンチャクが生息しています。これらの生物の分布を調べると、房総以北の地域ではほとんど見ることができないため、房総は黒潮本流の影響を受ける北限であることがわかります。

▲サンゴのなかま。

今回の特別展示では、黒潮の影響を受け、房総に生息するサンゴやイソギンチャクの仲間、チョウチョウウオの仲間などのほかにも、初めての試みとして、海水系の水槽で陸上の植物であるハマユウも展示しました。このハマユウは、夏休み期間中、水槽のまわりで白い可憐な花を咲かせて、南国ムードをかもし出してくれました。水槽の中では、いっぱいに開いたサンゴのポリプが水の動きに合わせて優雅に動く様子や、ポリプの間から顔をのぞかせる南の国の魚たちがお客様の目をより一層楽しませてくれました。しかし、サンゴの展示には、様々な工夫を必要としました。サンゴのポリプの開きをよくするために特別な照明を増設したり、性能のよい温度調節機を用いたりしました。また、サンゴの水槽には魚病の薬が使えないため、流水殺菌器をとりつけるなど魚病の発生にも気を配りました。このような努力と工夫の積み重ねにより、サンゴと魚類の混養飼育の技術を一歩進めることができました。（小坂・森・金原）

トピックス

海のアイドル わんぱくラッコがやってきた。

▲気温10℃に保たれた保冷車でシーワールドへ。

▲アラスカから20時間の長旅の末、 新装 なったラッコ展示水槽に無事到着。

昭和61年10月2日、待望のラッコが当館へやって来ました。ラッコの展示は全国で9番目、千葉県では初めてのことです。成田空港に到着したラッコ達は、 気温10℃に保たれた保冷車に積みかえられ、アラスカからの空路も含め約20時間の長旅の末、 新装 なった鴨川シーワールドのラッコ展示水槽に収容されました。ラッコ展示水槽はラッコの飼育に適した室温14℃、湿度65%、水温10℃の環境を維持するための特別な機械設備を備えた施設で、今年5月に完成したものです。

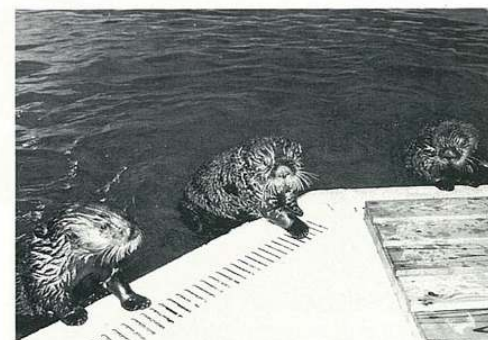
プールに入れられたラッコ達は、しきりにからだを回転させたり、毛皮をこすったり、なめたり、毛と毛の間に空気を吹きこんだりして長旅ですっかり汚れた毛皮を元にもどすのに大忙しでした。このようなラッコ独特のグルーミング（毛づくろい）行動を見るだけでも、いかにラッコにとって生活をしていくために毛皮が重要なものかがわかります。グルーミングが終ると水面にあお向けになって浮き、眠りはじめました。前肢で眼をおおうしぐさや、尾だけをユラユラ動かし、眠りながら方向を変えるなど、とてもユーモラスなしぐさが見られました。
毛皮は毎日しばしば繰り返されたグルーミングにより次第に光沢を増し、水のはじきも良くなり、数日後にはフワフワした輝く毛皮をとりもどしました。

大好きなイカ・貝などを胸いっぱいに▶かかえてお食事中。

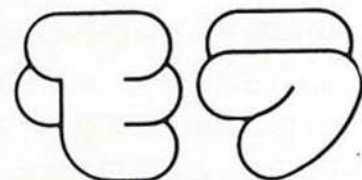
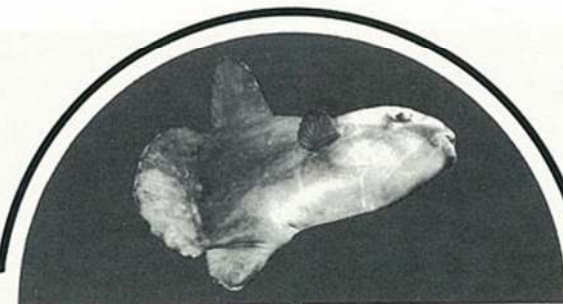
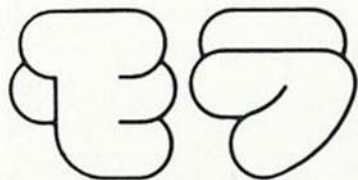
搬入されたラッコは、動作が最も活発で食いしん坊の一番大きな4才のメスと白い顔としぐさがかわいい3才のメス、まだ子供でヤンチャ坊主の1才半のオスの3頭ですが、オスと4才のメスは親子なのか、とても仲が良く、オスがかん高い声で「キーキー」鳴いて近よると、メスはオスをお腹の上に乗せ、グルーミングをしてやったり、お乳を吸わせるなど、意外な光景も見られました。

10月10日より一般公開され、給餌の時には水槽の前は大勢の観客が集まり人垣ができるほどの大人気で、早くも海のアイドルぶりを発揮しています。お腹をテーブルがわりにして餌を置き、前肢でしっかりと餌を持ち、いかにもおいしそうに食べますが、テレビなどでお馴じみの貝をたたき合わせて割る動作を見せてくれた時などには、お客様だけではなく、職員からも歓声がわきあがっています。お腹の上に沢山の餌を置いているのに餌をねだりに来るなど、ちゃっかりしたところもあり、脇の下のダブダブの毛皮で作ったポケットの中に餌をかくし、食べてしまったようなしぐさを見せる時などには、係員もだまされてしまうことがたびたびあります。また貝を水槽の壁やガラス面にたたきつけて割るなど、わんぱくぶりも評判通りです。

鴨川シーワールドのゆかいな新しい仲間、海のアイドル、わんぱくラッコ達をどうぞよろしく!!

（荒井）

▲食事時間に全員集合。すっかり馴れた、左からオス（1才半）メス（4才）、メス（3才）。

▲10月10日一般公開！ラッコを一目でものお客様でいっぱい。

▼小さなオス（1才半）の授乳光景。

●イルカの出産

5年ぶりにイルカの出産がありました。母親はバンドウイルカのスリムで、シーワールドでは6例目、スリムにとっては3回目にあたります。血中の黄体ホルモンの検査結果により妊娠の可能性があったので、今年2月に胎児心音計をスリムのお腹にあててみたところ、1分間に 110回の赤ちゃんの心音を聴くことができ、妊娠が確認されました。そこでショーのチームより引退させ、出産の日を待ち望んでいたところ、8月22日朝、無事に仔イルカを出産しました。授乳もすぐに見られ、乳母役のスージーも加わり仔イルカを真中に「川の字」になって泳ぎ、育児も順調に経過しました。2ケ月目を過ぎた頃から仔イルカは、周りの事にも興味を示すようになり、ヤンチャな一面を見せはじめています。　（毛利）

●シャチショープール完成間近！

前号で紹介いたしました、クジラ行動生態展示大水槽建設工事は、名称もオーシャンスタジアムに決定し、来年3月オープンにむけて現在急ピッチで進められています。

今年4月の着工からすでに半年以上が過ぎましたが、その間建設工事は順調に進み、現在では2200人収容の扇形観客席がほぼ完成に近づいたことで建物の容姿が園内からも眺められるようになりました。また日本一を誇る楕円形鯨プールの本格的な建設をはじめ、日本でも例のない水中観覧のできるレストランなどの諸施設が今、建築に設備にと大忙しで進められているところです。来年3月にはお客様にも好評いただけるオーシャンスタジアムとしてオープン出来るものと楽しみにしています。　（君塚）

●オリジナルビデオソフト制作

当初の制作目的はセールス用ツールとしてのみ考えていましたが、検討しているうちに「どうせ作るなら他にない内容にして販売もしてみよう」と言うことになりました。6月末のことでした。

7月末には完成させようと、それからは製作業者の選択、シナリオ、パッケージ・デザイン等の打ち合わせに追われる毎日となりました。単なる施設紹介ではなく、人間と生きものたちとのふれあいをテーマに、生きものたちのゆかいな表情や行動、はてまた普段見ることの出来ない出産シーンやアングル等も収めようと随分欲張りました。

出来栄えについては思っていた以上だと自画自賛しています。今後は学校等へも無料貸し出しを行い、生きものたちへの啓蒙に少しでも役立てればと考えています。（村田）

●新ショーオープン

7月25日、サマーシーズンの開幕と同時に、海獣ショーの内容が新しくなりました。

シャチ・イルカショーは、総合タイトルを「ザ・ドルフィンワールド」と題し、ダイナミックなジャンプが中心のイルカショーと、マリンフレンドとしてトレーナーとシャチとの水中での楽しいふれあいを紹介するシャチショー を行っています。アシカショーは、テーマが「一寸法師」から「アシカのズッコケ捕物帳」に変わり、トレーナーとアシカの演ずるパントマイムが笑いをさそっています。また、マリンシアターのベルーガによる水中ショーも「ベルーガインカウンター」のテーマで、ダイバーとベルーガとの交流を通しイルカや鯨達の能力を紹介していますので、ぜひご覧ください。　（前田）